

## 「映画」の思い出

野瀬 隆平

お正月に、ほろ酔い機嫌で取りとめもなく子供の頃を思い出していた。初めて映画なるものを観たのは小学生の時である。

当時、私は札幌に住んでいた。家から市電に乗っておよそ15分で、「今井」百貨店のある四丁目の交差点に着く。確かその5階だったと思うが、ニュース映画だけを専門に上映する劇場があり、記憶が正しければ入場料は2円99銭だった。手に一円硬貨3枚を握りしめ切符売り場へ向かい、わずかなおつりをもらって館内に入る。いつも満員で大人たちの後ろからは背伸びしても見えない。そのうちに徐々に前に押し出され、やっとスクリーンを見ることが出来る。

その頃、映画館では劇映画の上映前に、必ず各社が製作したニュース映画を何本か映写していたが、そのニュース映画だけを纏めて観せるのである。甲高い女性アナウンサーの声や独特の響きを持つ男性アナウンサーの声が、今も耳に残っている。何度も同じフィルムを使うので、画面に雨が降っている様に見えた。

最初に観た劇映画は「ターザン」だったと思う。ワイズ・ミュラーが主演。森の中を木の蔭にぶら下がり、「アー・ア・アー」と奇声を発しながら動き回る画面が今も目に浮かぶ。美空ひばりの映画もこの頃観た記憶がある。タイトルは「悲しき口笛」だったか。しかし、ストーリーはほとんど憶えていない。

映画を観たあとは、近くの繁華街、狸小路にある模型の専門店で立ち寄るのが常であった。鉄道や船の模型作りに夢中になっていた私は、お小遣いをためて部品を少しずつ買い足して、時間をかけて完成させるのである。

映画と云えば、忘れられないのは小学校の校庭での映写会だ。夏の夜、校庭にシートを繋ぎ合わせたスクリーンが設けられそこに映すのである。確か、松竹の「カルメン故郷に帰る」で、主演は高峰秀子だった。国産初の総天然色ということだった。

東京に引っ越ししてからの中学、高校時代は勉強、勉強と云われて、映画を観ることはほとんど無かった。